

景観守るウィーンの心意気

JAL初代支店長 井上 時男

私は1965年9月に日航ウィーン営業所開設のためにウィーンに赴任し、以来5年半を過ごしました。当時の対日感情は、両国が先の戦争の同盟国であったこともあって、大変良い時代でした。入国時税関も日本人と知ると全く荷物を開けもせず通してくれました。

最初の営業所は、ノイエマルクト脇のビルの7階にしました。開設時の思い出は、ネオンサインをビルの角に飛び出すように垂直に取り付けようとしたところ、聖ステファン教会の景観の妨げになるから、屋上に水平に設置するようにウィーン市から言われて驚くと同時に、ウィーン人の町の景観、特に中心部のそれを大事にする気持ちを感じて、感心したことです。

ところが、ネオンサイン取り付けの納期が遅れそうになったので、本社から副社長が来る2月の開所式に間に合うかどうか危なくなりました。そこで業者の社長と一杯飲みながら、我々は友軍として共に戦ったが、打ち合わせたことが出来ないようでは共同作戦に負けるのではないかと言ったところ彼は同感し、3日間24時間作業をして間に合わせてくれました。その代り寒空の外で働く作業員が1時間毎に交代で暖を採る為室内に入って来るので、私も3日徹夜してコーヒーを沸かし、これが新営業所内の私の最初の仕事となりました。

営業も軌道に乗り大分経ってから、確か小熊節子さんから日本人会の会長を引き受けるようにお話がありました。当時ウィーンには、大使館、国際機関（IAEA）関係者、留学生（特に音楽関係）、新聞社・商社関係の日本人がおり、それぞれのグループ内の交流はありましたが、特別の日に大使館が呼んで下さる以外は、グループを超えて皆が一緒に遊ぶ機会は日本人会しかなく、日本人会としてピクニックなどで交流を図って欲しいとのご要望だったので、早速、山や、お城にピクニックに行きました。当日は、駐在員の方々の奥様方を始め、色々な方が差し入れをして下さり、皆大喜びでした。皆様も初めてお会いする方々とお会いし、お友達になることも出来たと思います。



1966年秋の日本人会の遠足

当時は、今や世界的に活躍されているピアニストの内田光子さんや、深沢亮子さん、

（故）田中希代子さん等、又、後にUNIDOで活躍された瓜生明さんも未だ学生さんでした。

又、ウィーンの我が家にはJALがファミリー・サービスの一環として揃えた日本

図書が200冊位あり、よく駐在員の奥様方が借りに来られて喜ばれました。留学生の方々には学業のお邪魔にならぬように、特に宣伝はしませんでした。人伝に聞いて来られた学生さんには喜んでお貸ししました。

日本人会での交流を通してお知り合いになった幾人かの駐在員や学生の方々と、オペラ座やシェンブルン宮での舞踏会などに出かけたのも、若いころの楽しい思い出となりました。

当時は未だカイドブックも殆ど無く、日本料理店も、日本食材を売る店も一軒も無



かったもので、日本米に似たリゾットの名前や、日本食材に似た食材を売っている店の名前や、その料理法等は大変貴重な情報で、日本人会でお知り合いになれた方々と情報交換をいたしました。

40年以上も前、音楽、芸術の都ウィーンに出てきた日本人達は、オーストリア人が、芸術はもとより服装や立ち振る舞いの優美さを尊ぶ人々であることを感じ、感心する一方、彼らから

クリスマスの集いで歌う女性ら=大使公邸で1971年冬

日本の新幹線の技術を感じられ一寸得意になり、大国扱いされて少々戸惑ったような気がします。並走する自動車を見る見る内に抜き去る新幹線をニュース映画で観たオーストリア人は、自動車がアウトバーンを走っていると思い違いし、それを抜き去る新幹線は200ないし250キロの速度だと誤解したのかと思いましたが、敢えて指摘しませんでした。ウィーンで日本人としての自覚を持ちながら、日本の為、又、オーストリアの為に何かしようと一生懸命な時代でした。ウィーンの思い出は一生の宝です。



日航の(ニューヨーク・ロンドン線開設による)路線開設世界一周披露パーティ
(Palais Palfi で1966年4月頃)